

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：14501

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13119

研究課題名（和文）社会批判の時間性 ディストピア文学とSFにおけるノスタルジアの逆説性の探求

研究課題名（英文）The Temporality of Social Criticism: Nostalgia and Its Paradox in Dystopian Fiction and Science Fiction

研究代表者

中村 麻美（Nakamura, Asami）

神戸大学・国際文化学研究所・講師

研究者番号：80827709

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は二十世紀後半以降の英語圏ディストピア文学ないしSFにおけるノスタルジアの政治性を、特にジェンダー・セクシュアリティの視点から考察・分析するものである。ディストピア文学は個人を独立した自律的存在でなく、社会システムの所産として描き出しながら、現実社会を異化する。ここで、社会的想像力を描くディストピア文学におけるノスタルジアは、個人の感情にとどまらず、政治的意味合いをまとう。本研究はノスタルジアの主体の多様性に注目することで、マイノリティによる過去の修復的再想像の術としてのノスタルジア、そして「伝統的性役割の復興や、原始的自然へ回帰といった思想を強化する情動としてのノスタルジアを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ノスタルジアとは自身が「ホーム」と名指す場所、ひいては過去を切望する情動を示す。ここで、ディストピア文学が「ユートピア的」とされる所以の一つに、多くの作品において、過去を切望し理想化するノスタルジアが、非理想的な未来への不安と対置されていることが挙げられる。「いま・ここ」を拒否、あるいは迂回するノスタルジアに注目することで、社会批判のレトリックを多角的に読解する術を提示することができたと考える。

研究成果の概要（英文）：This research focused on nostalgia and its political dimension in Anglophone dystopian literature and/or SF (science/speculative fiction), particularly through the lens of gender and sexuality. The term nostalgia, a Greek compound of nostos, returning home, and algos, pain, signifies a wistful longing for home, or by extension, a particular era in the past. In dystopian fiction and SF, which depicts the individual as an effect of social systems rather than an autonomous and independent being, nostalgia is not merely a private emotion but rife with political meanings. By focusing on diverse subjectivities of nostalgia, this project shed light on two aspects of nostalgia in dystopian fiction and SF: first, nostalgia as a means of reparative reimagining by minoritarian subjects, and secondly, as an affect that reinforces the restoration of traditional gender roles and the return to fantasies of unspoiled nature, which is often mobilized by those who are in power.

研究分野：英語圏文学

キーワード：サイエンス・フィクション スペキュラティブ・フィクション ノスタルジア 記憶 ジェンダー セクシュアリティ ユートピア ディストピア

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

本研究計画は、二〇一八年にリヴァプール大学(イギリス)に提出したディストピア小説ないし帰郷をテーマにした関連小説におけるノスタルジア概念を探求した博士論文が起点となっており、SF(サイエンス・フィクション、あるいはスペキュラティブ・フィクション)におけるノスタルジアの政治性についてこれまでの分析内容を深化・拡張させることを目的とし、構想されたものである(なお本書類において、SFはユートピア・ディストピア文学を含むジャンルとして考える)。ディストピア文学は、あり得る社会を思考実験のトポスとして設定しながら、現実世界を異化することで、アイデンティティや権力の問題をあぶりだす。その意味で、ディストピアは社会的想像力が結実した文学と言える。一方、Fredric Jamesonは*Archaeologies of the Future: The Desire Called Utopia and Other Science Fictions*(2005)において、社会批判装置としてのSFをその時間性から解き明かす。JamesonはSFの未来社会を予言する機能よりも、現在を歴史化する機能を重要視しつつ、SFを、「現在」を歴史の一部として相対化し脱中心化することで、「常識」として当然視されがちな社会構造やイデオロギーを批判する装置として梓づける。

このようなSFの時間的異化作用のなかでも、本研究ではノスタルジアという過去や記憶にまつわる情動に着目した。元来ノスタルジアとは「帰郷(*nostos*)」と「痛み(*algos*)」を意味するギリシャ語の複合語としてつくられた造語であり、ホームシックネス、あるいは郷愁の念を意味する。ノスタルジアを論じる際重要となるポイントとして、対象が必ずしも明確ではないことが挙げられる。つまり、欲望される「ホーム」が自己の経験と直接的に結びつく場所や子供時代である場合、あるいはより抽象的な過去の一時代である場合などがあり、「ホーム」の曖昧さは、対象への理想化と不可分な関係にある。ここでユートピアは理想的な場所(*good place*)、そしてどこにもない場所(*no place*)といった二重の意味があるが、ノスタルジアを通して切望され、理想化される「いま・ここではない」場所や時代はまさにユートピア的と言える。ノスタルジアは、過去・現在・未来を数直線的に捉える継起的な時間観を複雑化する。その意味で、現実や常識を異化するSFにおけるノスタルジアを研究することは多様なテンポラリティ(時間性)やそのダイナミクスを捉えようとする試みであるとも言えよう。本研究課題を進めることで、博士論文の内容を発展・深化させながら新たに論文を執筆・出版し、さらに英語圏文学におけるSFというジャンルが内包する豊かな読解の可能性やオルタナティブな社会的想像力を探求していくことができると考えたのが、本研究の発端である。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、特に二十世紀後半以降の英語圏SFの小説や映像作品におけるノスタルジアと社会批判の関係性を分析することにより、ノスタルジアが単なる個人的な感情ではなく、政治的側面を持つものであることを精査することにあった。一般的に、ノスタルジアは文化的退行や過去の神話化の症候として批判されることが多い。ただ、ノスタルジアはそういった退行的・復古的なものに限られるわけではないことは、ノスタルジアを経験する主体の多様性に注目することで浮き彫りとなる。本研究課題では特にジェンダー・セクシュアリティに着目することにより、理想化される過去から排除されたマイノリティの問題や権力関係を明確化することで、過去を振り返るという行為の政治性を探ることを主眼の一つとした。これに加え、特にMargaret Atwoodの作品群における伝統的性役割の復興や、エコ・ファシズム(理想化された原初の状態への回帰を、特定の人間の排除を通して達成しようとする危険思想)がノスタルジアをベースとしたレトリックによって正当化されている点を明らかにすることを第二の主眼とした。このように、時間論だけでなく主体論も有機的に取り入れることで、各作品における社会批判の限界と可能性を解明することができた。

## 3. 研究の方法

理論的基盤としてはクィア・テンポラリティ論やポストヒューマン論における最新の議論を取り入れ、また、各SFテキストの精読を通して、物語の社会的想像力とその政治性に深くアプローチしながら、「ディストピア」が如何なる時間軸で想像されているかを多角的に考察してきた。研究方法の大枠として、以下の二点が挙げられる。

### (1) ノスタルジアを通じた過去のオルタナティブな再想像の探求

ノスタルジア研究の古典としては、Svetlana Boymの*The Future of Nostalgia*(2001)が有名であるが、本研究ではそこで提示されているrestorative nostalgia(復古的ノスタルジア)とreflective nostalgia(内省的ノスタルジア)の二分法に依拠しながらも拡張することを目指していた。特に、ノスタルジアはその主体がマジョリティに属する場合は保守的となる傾向があるものの、マイノリティの場合は抑圧されてきた過去を自己の歴史として再領有するという意味で未来に開かれたものとなり得る。この観点に関しては、Eve Kosofsky Sedgwickの著書*Touching Feeling: Affect, Pedagogy, Performativity*(2003)に収録されている、パラノイア

的読解と修復的読解の枠組みを応用しながら、ノスタルジア論に繋げている Nishant Shahani の *Queer Retrosexualities: The Politics of Reparative Return* (2011) に負うところが大きい。Shahani は過去・現在・未来を目的論的・進歩論的に捉えるのではなく、トラウマ的であり得る過去を創造的に再構築しながら、非規範的な欲望を充足することで新たな未来への裂け目を探し当てる、という形で、いわば、ノスタルジアをクィアするのだ。さらに、Alexis Lothian の *Old Futures: Speculative Fiction and Queer Possibility* (2018) はまさにクィア・テンポラリティ論を SF 批評に接続した野心的研究であり、これまでに SF で想像されてきた、規範から逸脱するようなオルタナティブな未来像の数々を丹念に拾っていく。「誰にとっての」ノスタルジアか、「誰にとっての」未来なのか といった問いを中心としながら、以上の代表的先行研究を参照することで、ノスタルジアのクィアな可能性を、SF というオルタナティブな社会的想像力の装置を通して検討するという本研究の理論的枠組みを強化することができた。

## (2) 「未来性」「人間性」の再考

クィア理論における再生産的未來主義(現状の永続化)批判や、ポストヒューマン論のトランスヒューマニズム(テクノロジーを介した伝統的ヒューマニズムの拡張)批判を融合しながら、未来を想像するプロセスにおいて、現在を構成している規範(特に、異性愛・シスジェンダー規範、健全者主義)が SF テキストにおいて如何に異化されているのか、あるいはされていないのかを問うた。進歩史観や経済的成長が前提とする時間性は直線的で、人類文明や資本が常に発展・拡大していくことを基盤としている。これに対し、オルタナティブな、複数の時間軸を提示することで認知の限界に挑む SF 作品は多数あるが、本研究はそれがどの程度でそうといえるのか、批判的に吟味することで多角的な視点を提供してきた。さらに、SF には異化機能を通し、「人間性」という概念が規範的に機能するときに排除するマイノリティや様々な存在に焦点を当てる、という側面がある。ただ、各作品内のアイロニーや多層性を深く把握しそこねると、誰の「人間性」を認めるか認めないか、というような人間中心で差別的な議論につながることもあり、注意が必要とされる。

以上二点の枠組みから、著名なディストピア作品を残している Katharine Burdekin、George Orwell、Margaret Atwood、Kazuo Ishiguro らの作品群を主に分析し、論文出版を実施してきた。他方、主体性に関する考察を一層深めるため、ノスタルジア概念を理解する上で進めてきた情動に関する研究を応用する形で、特に Philip K. Dick や Ursula K. Le Guin、そして Margaret Atwood らによる SF 作品におけるエンパシー(共感性)の表象を探求することにより、連帯やコミュニティ・ビルディングにおける情動的基盤として肯定的に捉えられがちな共感性を、批判的に(特にニューロ・ダイバーシティやクィア・フェミニズム、人種の観点から)分析してきた。こちらに関しては現在研究を進めているサイボーグ論、ないしテクノ・オリエンタリズム論(いわゆる西洋の SF において、アジアが未来的かつ後進的なものとして逆説的に表象され、他者化される様子を批判的に検討する理論)へと議論を発展させており、例えば本研究代表者が二〇二三年に実施した Kazuo Ishiguro の *Klara and the Sun* (2021) に関する発表や、それに基づいた論文(未発表)につながっている。

## 4. 研究成果

本研究計画を通して、国内外の様々な学会やワークショップにて研究発表を実施し、フィードバックを得ることでより多様な視点を取り入れながら、論文執筆・出版を重ねてきた。まず、新型コロナウイルスパンデミック、またそれに伴う国内・国外の移動の制限により、当初予定していたスコットランドでの調査や、アメリカでのアーカイブ調査は断念することとなった。ただ、パンデミック下において増加したオンラインの学術イベントに積極的に参加することで、専門領域に関する知や方法論について多くを学ぶとともに、他者との交流を通して自己のフレームワークを常に見直すよう心掛けた。具体的には、Rosi Braidotti のワークショップへの参加(2020年、2021年)、国際学会の企画・開催(2021年)、本研究に直接的に関連する様々なオンライン国際学会への参加(Living in the End Times: Utopian and Dystopian Representations of Pandemics in Fiction, Film and Culture [2021], Medical Humanities and the Fantastic: Neurodiversity and Disability[2022], When It Changed: Women in SF/F since 1972[2022])などが挙げられるが、その他関連する様々なオンライン講演にも可能な限り参加することで、パンデミックという困難な状況においても、国内外の研究者やアーティスト、活動家らとの交流を実践し、自身の研究トピックを多角的な視点から掘り下げることができた。以下、代表的な研究成果について詳述する。

### (1) SF とノスタルジアに関する査読付き英語論文の出版

SF 研究で代表的な国際学術雑誌である *Science Fiction Studies* のノスタルジア特集号に本研究実施者の英語論文 'On the Uses of Nostalgia in Kazuo Ishiguro's *Never Let Me Go*' が掲載された。本論文は Kazuo Ishiguro の *Never Let Me Go* (2005) と、その日本 TV ドラマ版(2016)におけるノスタルジアの諸相を明らかにするものだ。本小説には先行研究が多々あるが、本論文では理論面でクィア理論とノスタルジア論を橋渡しし、さらにアダプテーション論も

有機的な形で含めている。クローンである主人公の回想録で特徴的なのは、権力者から与えられたもの 子供時代における学校生活や仕事 を自分のアイデンティティの一部として再領有することで自らの運命、そして死を受容する試みである。この点において、本小説はディストピア小説に典型的な、対抗ナラティブの構築や悲観主義、そしてヒロイズムを後景化し、時間経験の複雑性や、死の受容という(逆説的ではあるが)生成的であり得るプロセスの探究へと読者を誘う。このような物語は、一見、政治的な側面が弱く、主人公に関しても再領有とは名ばかりの、いわば開き直りの態度が表れているようにも思われる。しかし、本小説は資本主義・異性愛主義社会における再生産的未来主義(‘reproductive futurism’、Lee Edelman, *No Future: Queer Theory and the Death Drive* [2004])が依拠する直線的な時間を、周縁化された主体がノスタルジアを通して攪乱することで、構成的外部として唾棄され、生を否定された者がそれを自ら肯定する試みの可能性を提示するという意味では極めて政治的であることを論証した。*Science Fiction Studies* 編集担当の英文学者である Yugin Teo 氏(ボーンマス大学)と Aris Mousoutzanis 氏(ブライトン大学)からは論文の内容だけでなく、編集作業における研究者としての真摯な態度を評価され、論文自体も引用数を伸ばしている。

(2) 国際学会(‘Feminist/Queer Utopias & Dystopias: Alternative Worlds Imagined through Non-normative Desires and Bodies’)の企画・開催

二〇二一年三月、Stefan Würrer 氏(武蔵大学)と共に、フェミニスト・クィアの視座からユートピアとディストピア表象を再考する国際シンポジウム(英語)を企画・開催した。企画段階で、これまでにクィア理論とノスタルジア、そしてユートピア・ディストピアに関する重要な論考を発表している Nishant Shahani 氏(ワシントン州立大学)の招聘を研究代表者が提案した。最終的に Shahani 氏の基調講演、また、四人の発表者らのプレゼンテーションやラウンドテーブルを含むシンポジウムには日曜早朝にも関わらず二百人を超える出席者が参加し、パブリック・エンゲージメントとしても成功を収めたと言える。研究代表者はシンポジウムのオーガナイズだけでなく、イギリスのSFドラマ作品である *Black Mirror* シリーズにおける、‘San Junipero’(2016)におけるクィア・ノスタルジアについて研究発表を行った。ディストピア作品として有名な *Black Mirror* における唯一のユートピア的エピソードとされる‘San Junipero’(2016)は女性同士の愛とそのクィアな喜びを前面化する。本作品は、HIV/AIDS の拡大や同性愛者の権利促進を阻んだマーガレット・サッチャーの「セクション28」に特徴付けられる、同性愛者にとってトラウマを喚起するような八十年代の否定性を抑圧せず巧みに示した上でかつ、クィア・ユートピアとして再領有することで、ノスタルジアの修復的機能を映像化する。本分析を通じ、SFにおける記憶の問題を精査するだけでなく、障害とテクノロジーの関係性をサイボーグ論から再考する端緒を得ることができた。本発表の内容に、*Black Mirror* の他のエピソードで、‘San Junipero’ と対を成す ‘Mazy Day’(2023)を比較分析する論文を出版する予定である。これに関しては、Museum of Science Fiction 発行の学術雑誌 *MOSF Journal of Science Fiction* のヴァーチャル・リアリティとサイバースペースの特集号に論文アブストラクトを提出済みである。

(3) 論集『マーガレット・アトウッド『侍女の物語』を読む フェミニスト・ディストピアを越えて』(2023)の共編・出版

まず、本論集企画のきっかけとなった論文、「家父長制批判としての『一九八四年』?」(秦邦生編『ジョージ・オーウェル『一九八四年』を読む ディストピアからポスト・トゥルースまで』(2021)所収)では、George Orwell の *Nineteen Eighty-Four* (1949) の解釈で見過ごされやすいジェンダーの問題を、網羅的に論じた。「ヨーロッパ最後の男」として英雄化される主人公ウィンストン・スミスは白人/シスジェンダー/異性愛者であり、そういった属性を考慮した場合、実は「最後」に抑圧される対象である。というのも、女性、非白人、性的「逸脱」者などのマイノリティの人々はオセアニアというディストピアの出現以前から、イギリス社会で二級市民とされてきたからだ。本論文では女性の表象やレイプ文化といったテーマに焦点を当てることで、ディストピアの人々は平等に抑圧されている訳ではなく、被傷性はジェンダーという軸に基づき不均等に配置されていることを詳細なテキスト分析をベースに主張した。本論文は川端康雄氏の『オーウェル『一九八四年』: ディストピアを生き抜くために』(2022)でも引用されている。

上記論文の出版をきっかけとし、都留文科大学の加藤めぐみ氏との共同編集という形で企画されたのが、*Nineteen Eighty-Four* と比較されることの多い Margaret Atwood の *The Handmaid's Tale* (1985) に焦点を当てた論集である。一九八五年に出版されたディストピア小説であるが、近年#MeToo 運動やリプロダクティブ・ヘルス/ライツの国際的な動向を背景に、二〇一七年にドラマ化され、一気にメインストリーム化された。つまり、*The Handmaid's Tale* という小説へのノスタルジックな回帰が現在進行形で起こっているとも言える。そういった観点からも、様々な角度から本小説を精読するような論集が必要とされていると判断し、本論集の

出版に至った。

研究代表者は、企画・編集に加え、*The Handmaid's Tale*と気候変動や遺伝子工学、そしてエコ・ファシズムを扱った *MaddAddam* 三部作 (2003-2013) をポストヒューマンの視点から接続する論文、Atwoodのフェミニスト・ディストピアに関するエッセイの解題、*The Handmaid's Tale*に関連するフェミニスト・ディストピア諸作品の解説コラム、そして あとがきの執筆を担当した。特に論文 では *The Handmaid's Tale*とその続編 *The Testaments* (2019)、そして *MaddAddam* 三部作に共通する人間の家畜化や共食いのテーマを考察することで、各シリーズにおいて、家父長制の下「人間」の規範から周縁化された女性のへ抑圧が、動物への抑圧と地続きとして描かれている点について批判的に検討した。また、両シリーズにおける人口管理と、*MaddAddam* 三部作におけるサイボーグ、といった問題を検討し、これらの作品が提示する旧来の人間観に対するオルタナティブの可能性と限界について詳らかにすることで、今後さらに人新世に関する言説を分析する際の起点を得ることができた。またコラム では *The Handmaid's Tale* と設定が類似している Katharine Burdekin の *Swastika Night* (1937)、そして、*The Handmaid's Tale* から影響を受けたことを明言している著者らの作品群など、様々なフェミニスト的なディストピア作品を比較しながら論じた。これらの作品群の共通項として、男女二元論的な構図が強調されるあまり、人種や階級などに基づいた様々な差別の構図が見えづらくなり、また、二元論的ジェンダーに当てはまらないノン・バイナリーなどのアイデンティティが周縁化される、という問題が挙げられる。

加えて、論文「TVドラマ『ハンドメイド・テイル/侍女の物語』におけるシスターフッドの問題」(『言語文化』第四十号収録)はドラマ版を、共感性をキーワードに分析し論じた。ドラマ版は小説の世界を拡張することに成功しているものの、フェミニズムを白人女性のヒロイズムに還元してしまっている点で、権力関係の複雑性を看過するものとなっていることを指摘した。ドラマ版は黒人や移民の苦難を白人女性の主人公のそれとして置き換えるが、このように周辺化された人々を不在の指示対象とする限り、彼らへの共感とは真の意味で達成されない。白人が有色人種に取って代わられる (Great Replacement) あるいは女性は五十年代の伝統的な妻像に立ち返り、多くの白人を産むべき (Tradwives) というような白人至上主義的イデオロギーが未だに影響力を持つ中、*The Handmaid's Tale*のメインストリーム化はそういった文脈を踏まえた上で、特に人種の視点から批判的に検討される必要があることを確認した。

以上の研究を通し改めて確認できたのは、*The Handmaid's Tale*の風刺対象であるノスタルジアを情動的基盤とした伝統的性役割の復活が、アトウッドの他のディストピア作品 *MaddAddam* 三部作や、Ira Levinの *The Stepford Wives* (1972) を書き直した *The Heart Goes Last* (2015)、そして短編 'Freeforall' (1986) に通底していることである。また、アトウッドのディストピア小説がカナダではなくアメリカを舞台とする傾向にあることも植民地主義の観点から今後さらに議論を発展させる予定である。

#### (4) 博士論文で扱った帰郷小説の再考

論文「『空気をもとめて』における帰郷 (の失敗?)」アトウッド『浮かびあがる』と比較しながら」(『レイモンド・ウィリアムズ研究』第十二号収録)では、George Orwellの *Coming Up for Air* (1939) と Margaret Atwoodの *Surfacing* (1972) という、ディストピア作品で有名な著者らの帰郷に関する小説を、ノスタルジアとエコロジーを軸に論じ、両者における「自分探しの旅」の政治性を論じた。一人称で語られる両小説において、ノスタルジアは自身の傷つきやすさそのものを受け入れることで生への感受性を回復する情動的プロセスとして描かれており、また、ノスタルジアが自然との再会によって惹起されていることも特徴的だ。一方、パストラルなイメージは前者ではイギリス、後者ではカナダのナショナリズムと強く結びついている。本論文の執筆を通し、帝国主義や植民地主義が、個人の物語に、いわばノスタルジアの余剰として発現する様を探求し、また作品比較を通して、トランスアトランティックな見地の理解を深めることができた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中村麻美	4. 巻 12
2. 論文標題 『空気をもとめて』における帰郷（の失敗？） アトウッド『浮かびあがる』と比較しながら	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 レイモンド・ウィリアムズ研究	6. 最初と最後の頁 47-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村麻美	4. 巻 40
2. 論文標題 TVドラマ『ハンドメイド・テイル/侍女の物語』におけるシスターフッドの問題	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 明治大学紀要『言語文化』	6. 最初と最後の頁 154-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24620/0000003982	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Asami Nakamura	4. 巻 48
2. 論文標題 On the Uses of Nostalgia in Kazuo Ishiguro's _Never Let Me Go_	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Science Fiction Studies	6. 最初と最後の頁 62-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村麻美	4. 巻 9
2. 論文標題 ジョージ・オーウェル『一九八四年』とナオミ・オルダーマン『パワー』におけるレイブ文化の読解	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 レイモンド・ウィリアムズ研究	6. 最初と最後の頁 59~77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Asami Nakamura, Pei Zhang
2. 発表標題 Do Cyborg Daughters Dream of Their Bodies?: Disruptive/Disrupted Subjectivities in The Membranes and Klara and the Sun
3. 学会等名 Disruptive Imaginations (Science Fiction Research Association, Gesellschaft fur Fantastikforschung) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中村麻美
2. 発表標題 『空気をもとめて』における帰郷（の失敗？） アウトウッド『浮かびあがる』と比較しながら
3. 学会等名 日本女子大学ジョージ・オーウェル生誕120周年記念イベント「暗闇のなかの希望」（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中村麻美
2. 発表標題 ディストピアで多様性を考える
3. 学会等名 SDGs（持続可能な開発目標）と人文学（3） 文学に探る（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村麻美
2. 発表標題 Feeling otherwise ポストヒューマン・エンパシーの可能性
3. 学会等名 連続ワークショップ ポストヒューマンの視点から（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中村麻美
2. 発表標題 TVドラマ『ハンドメイド・テイル/侍女の物語』における共感(エンパシー)の諸問題
3. 学会等名 トランスレーション・アダプテーション・インターテクスチュアリティ 2022 『時代を映すアダプテーション』（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Asami Nakamura
2. 発表標題 "Queer Nostalgia in 'San Junipero' (2016) "
3. 学会等名 Feminist/Queer Utopias & Dystopias -- Alternative Worlds Imagined Through Non-normative Desires and Bodies (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Asami Nakamura
2. 発表標題 "Queer Nostalgia in _Black Mirror_'s 'San Junipero'".
3. 学会等名 Gender Studies Winter School
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Asami Nakamura
2. 発表標題 Aestheticised Nostalgia in Kazuo Ishiguro 's _Never Let Me Go_
3. 学会等名 Splintered Memories: Life in the Glasshouse (国際学会)
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 中村麻美
2. 発表標題 『1984年』とフェミニスト・ディストピアレイブ文化と女性化という視点からの読解
3. 学会等名 オーウェル『一九八四年』とディストピアのリアル 刊行70周年記念シンポジウム(招待講演)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 加藤めぐみ・中村麻美(共編)、マーガレット・アトウッド、西あゆみ、奥畑豊、三村尚央、小川公代、生駒夏美、渡部桃子、小谷真理、高村峰生、安保夏絵、シュテファン・ヴューラー、石倉綾乃	4. 発行年 2023年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 326
3. 書名 マーガレット・アトウッド『侍女の物語』を読むーフェミニスト・ディストピアを越えて	

1. 著者名 秦邦生(編)、マーガレット・アトウッド、西あゆみ、星野真志、中村麻美、川端康雄、ジャン＝フランソワ・リオタル、郷原佳以、伊達聖伸、小川公代、渡辺愛子、小田島創志、高村峰生、吉田恭子、加藤めぐみ、高橋和久	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 314
3. 書名 ジョージ・オーウェル『一九八四年』を読む ディストピアからポスト・トゥルースまで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>[書評] 「ローズ・マコーリー著『その他もろもろ ある予言譚』ディストピア的想像力の多様性 「失われた」ディストピア小説の重要性、そしてディストピア研究の奥深さ」、『図書新聞』、3490、2021年。</p> <p>[講演会報告] 「ケアの倫理の源流へ 軋轢/葛藤/抑圧のなかのケア」、『立教大学 ジェンダーフォーラム ニュースレター「GEM」(じぇむ)』、47、2022年。</p>
---

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

## 7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 Feminist/Queer Utopias & Dystopias -- Alternative Worlds Imagined Through Non-normative Desires and Bodies	開催年 2021年～2021年
--	--------------------

## 8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------